

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14028

研究課題名（和文）学校行事における体験が児童生徒のレジリエンスに与える影響

研究課題名（英文）Effects of Experiences at School Events on Resilience of Students

研究代表者

原 郁水（HARA, Ikumi）

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：50794129

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：近年学校教育の中で不登校等の心の健康に課題を持つ児童生徒等が増加していることを背景に、レジリエンスに注目が集まっている。本研究では近年学校において体験的活動が重視されていることに着目し、学校での体験が児童生徒のレジリエンス（精神的回復力）に及ぼす影響を検討した。本研究では学校の教育活動の中でも特に特別活動に着目し、集団宿泊的行事や合唱コンクールなどとレジリエンスの関連を示した。ただ行事をやるのではなく、行事の中でどういった体験をするのが重要であることを明らかにした。また、レジリエンスが回復という動的な過程を含む概念であることを考慮し、困難な状況にあると考える子どもの状態を縦断的に検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校における教育活動の中でも特に教科指導以外の活動は効果評価を行われてきたとは言い難い。しかし児童生徒に全く影響を与えていないわけではないだろう。そのため、授業以外の活動が児童生徒にどのような影響を与えているのかを検討する必要がある。その際の測度としてレジリエンスを用いることが出来るのではないかと考えた。集団宿泊的行事や合唱コンクールについて検討を行った。

研究成果の概要（英文）：In recent years, resilience has been attracting attention due to the increasing number of school children who have problems with mental health such as school refusal. In this study, we focused on experiential activities in schools in recent years, and examined the effect of experiences at school on resilience of children. In this research, we focused on special activities among the educational activities of the school, and showed the relationship between group accommodation events and chorus competitions and resilience. It was clarified that what kind of experience you have during the event is important, not just the event. Also, considering that resilience is a concept that includes a dynamic process of recovery, we longitudinally examined the state of children considered to be in difficult situations.

研究分野：学校保健

キーワード：レジリエンス 特別活動 学校行事 縦断的研究

1. 研究開始当初の背景

子どもを取り巻く環境の急激な変化を背景に、学校教育に求められるものが多様化しており、学校における教育活動の過程や効果を明らかにすることが望まれてきている。特に教科の学習指導以外の活動はしっかりと評価されてきたとは言いがたく、効果評価が求められているところである。その中でも特別活動は、望ましい集団活動を通して、児童・生徒が生きていくために必要な種々の能力を養うことを目標としているが、平成 28 年 8 月に出された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、「特別活動においては、「なすことによって学ぶ」ということが重視され、各学校で特色ある取組が進められている一方で、各活動において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきた実態も見られる」と述べられている。このように、特別活動は学校において社会性や自主的、実践的な態度を育む大きな役割を果たしている一方で、その効果に関しては、これまであまり検討が行われてこなかった実態がある。そこで本研究ではその効果評価の測度として近年心理学や教育学の分野で注目されているレジリエンス(精神的回復力)に焦点を当てる。レジリエンスは「生きる力」と似た概念であるという指摘もある。また、国内外での非認知的能の必要性が高まっていることから注目されている概念である。

レジリエンスに関する先行研究のまとめによると、レジリエンスを高めるための方法の一つに教育的プログラムがあり、これはスキル重視型、体験重視型、環境重視型に分けられる。またプログラム以外にも周囲からサポートを得ることなどの環境要因や、責任のある役割を得ること、学業以外の面での達成といった学校におけるポジティブな経験がレジリエンスを高めると示唆されている。このことから体験活動を重視する特別活動によってレジリエンスが高まることが予測される。

しかし、これまでに学校での体験とレジリエンスの関連はあまり検討されているとは言いがたい。これまであまり行われてこなかった教科指導以外の学校における体験や経験の意義をレジリエンスの点から明らかに出来るのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、学校における様々な体験が子どものレジリエンスに与える影響について教育保健の立場からその実態を明らかにすることを目的とする。その際に大きく 2 つの点について検討する。

- (1) 学校における全体的な体験・経験が児童生徒に与える影響を検討する。
- (2) 学校における特別活動を通じた体験が児童生徒に与える影響を検討する。
- (3) 困難を抱えていると考えられる児童生徒のレジリエンスについて検討する。

3. 研究の方法

上記の目的に対応させて述べる。

(1) 児童生徒に対して学校における体験について体験の頻度とレジリエンスについて調査を行う。学校での体験について焦点を絞らずに尋ね、どのような体験生徒のレジリエンスに影響を与えるのか調査によって検討する。

(2) 学校教育における特別活動に焦点を当てて検討を行う。特別活動中の特に学校行事を通してどのような体験をしたかについて尋ね、行事そのものの量的な影響のみでなく体験の内容について調査する。

(3) 困難を抱えていると考えられる児童生徒に焦点を当て、その体験とレジリエンスについて縦断的に検討する。

4. 研究成果

(1) 学校における努力を伴う成功及び失敗経験とレジリエンス

学校における様々な経験が中学生のレジリエンスに及ぼす影響を 362 名の中学生を対象に 1 ヶ月の期間において 2 回調査を行った。1 回目の調査で、中学生が学校生活の中で経験すると考えられる努力を伴う成功及び失敗経験の項目をテキストマイニングなどから導き出し、項目化し 2 回目の調査で尋ねたところ、「委員や係の仕事にしっかりと取り組むことが出来た」「友人と意見が食い違っても、話し合うことで互いの意見のバランスが取れるようになった」「テスト勉強をしっかりと進めることができた」「部活の練習時間だけでなく、自習練習も行ったが、成果が出なかった」「部活で集中して練習に取り組めず、ミスをしてしまった」などが高い経験率を示した。成功経験や失敗経験の数は 1 回目や 2 回目調査時のレジリエンスとは相関を示したが、レジリエンスの変化量と相関を示さなかった。一部のレジリエンス変化量と成功頑張り度(自らが頑張ったと観じている成功経験の合計)は相関を示した(表 1)。また、成功体験の各項目における解答とレジリエンスの変化量の関係を分散分析で見たところ、「部活の練習・活動に休ま

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

「参加し実力がついた」という項目では、経験しかつあまり頑張っていないという生徒より経験しかつとても頑張ったという生徒の方がレジリエンスは肯定的に変化していた(表2)。他にも「部活で先輩や友人にアドバイスをもらい、上達した」や「委員や係の仕事にしっかりと取り組むことができた」「友達との関わりを大切にしたい」「より仲良くなることができた」「頑張ったのに、先生が自分の努力に気づいてくれなかった」の項目で同様の結果になった。以上より本研究から、ただ単に成功したと感ずる経験を積み重ねることはレジリエンスを高めることに効果的ではなく、特に勉強以外の内容で努力をしさらに成功すること、そしてそれを学校の先生などの他者から認められることが、レジリエンスを高めるために有効だったのではないかと考えられる。

表1 成功経験および失敗経験とレジリエンスの相関

	成功経験数	失敗経験数	成功頑張り度	失敗頑張り度
未来志向1回目	0.21 **	-0.37 **	0.33 **	-0.03
興味関心1回目	-0.21 **	-0.02	0.35 **	0.02
感情調整1回目	0.10	-0.02	-0.18 **	-0.01
レジリエンス合計1回目	0.24 **	-0.04	0.30 **	-0.01
未来志向2回目	0.26 **	0.00	0.45 **	0.03
興味関心2回目	0.19 **	-0.06	0.39 **	-0.02
感情調整2回目	0.08	-0.03	0.22 **	-0.07
レジリエンス合計2回目	0.24 **	-0.03	0.47 **	0.01
未来志向変化量	0.07	0.05	0.15 **	0.08
興味関心変化量	-0.03	-0.04	0.03	0.01
感情調整変化量	-0.03	-0.01	0.03	0.01
レジリエンス合計変化量	0.01	0.01	0.11	0.03

注1) 数字は相関係数, *p < 0.05, **p < 0.01
 注2) レジリエンス各尺度の「変化」は2回目 - 1回目で算出
 注3) 「成功経験」「失敗経験」は各15項目から生徒が選んだ数
 注4) 「成功頑張り度」「失敗頑張り度」は成功経験と失敗経験をそれぞれ頑張り度(「あまり頑張っていない」~「とても頑張った」まで3段階)を加味して合計したもの

表2 「部活の練習・活動に休まず参加し実力がついた」の回答とレジリエンス変化量

	0 経験していない n=89	経験した			分散分析結果	
		1 あまり頑張っていない n=94	2 頑張った n=138	3 とても頑張った n=41	F	多重比較
未来志向変化量	0.42 (3.18)	-0.23 (3.10)	0.22 (2.91)	1.20 (3.51)	2.122	
興味関心変化量	0.26 (3.48)	-0.58 (3.10)	-0.21 (2.50)	1.20 (3.51)	3.333 *	1<3
感情調整変化量	0.43 (2.24)	0.21 (1.70)	0.35 (1.77)	0.58 (2.33)	1.048	
レジリエンス合計変化量	1.10 (5.72)	-0.80 (5.16)	0.36 (5.50)	2.71 (5.95)	4.298 **	1<3

注1) 数字はレジリエンス変化量の平均値, ()内は標準偏差, *p < 0.05, **p < 0.01

(2) 特別活動(学校行事の集団宿泊的行事)における体験とレジリエンス

特別活動とレジリエンスの関係性を明らかにするため、小学5年生66名を対象に調査を行った。調査は集団宿泊的行事の約1週間前と約1週間後に行われた。調査の内容はレジリエンス尺度(未来志向、興味関心の追求、感情調整の3因子15項目、5件法)、児童用組織キャンプ体験評価尺度(自然とのふれあい体験:以下自然体験、他者協力体験、挑戦成功体験、自己開示体験、自己注目体験の5因子20項目、5件法)であった。各体験は自然体験、他者協力体験、挑戦達成体験の順に多くなっていた。また、未来志向、興味関心、感情調整、レジリエンス合計全てにおいて集団宿泊的行事の前後で得点に有意な差異は認められなかった。ここから、ただ単に行事に参加するだけではレジリエンスは高まらないということが明らかになった。それでは、どんな体験によってレジリエンスに差異が生じたのか、対応のある分散分析によって検討したところ、自然体験の高低によってレジリエンス中の未来

表3 各体験の平均値とS.D.

	平均値	SD
自然体験	4.42	0.801
挑戦達成体験	4.31	0.772
他者協力体験	4.42	0.608
自己開示体験	4.12	0.811
自己注目体験	3.18	0.809

表4 行事前後のレジリエンス得点

	平均値	SD	t	有意確率
未来事前	4.27	0.813	0.170	0.866
未来事後	4.26	0.774		
興味事前	4.12	0.861	-1.457	0.150
興味事後	4.22	0.778		
感情事前	3.68	0.885	-1.033	0.305
感情事後	3.77	0.891		
レジ事前	4.08	0.716	-1.022	0.311
レジ事後	4.13	0.682		

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

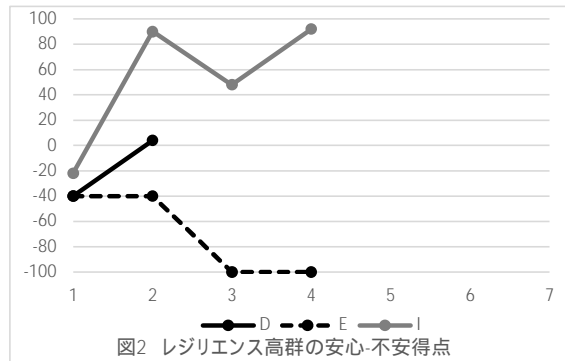
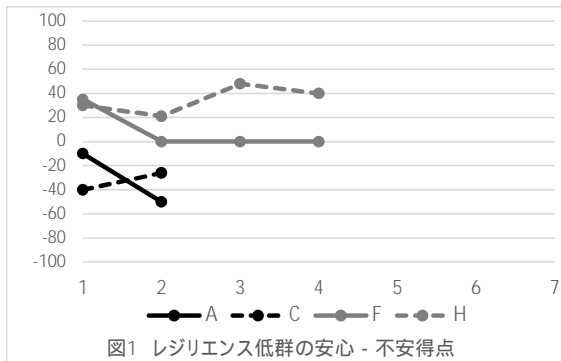
志向に差異が生じていた。また、自己注目経験の高低によって、未来志向に差異が生じていた。集団宿泊的行事の中でも多くの方が経験しており、今回の集団宿泊的行事の特徴とも言える自然体験(緑のにおいをかいだ等)を多くすることによってレジリエンスが高まることが明らかになった。また、自己注目体験(自分の良いところやだめなところについて考えた)は自然体験と違って体験率は高くない体験であったが、この集団宿泊的行事を通して自分に注目するという機会があった児童は、レジリエンスが高まったことが明らかになった。これらから、その行事に特徴的な体験や行事を通して自分を見つめなおすことがレジリエンスと関連するのではないということが示唆された。

(3) 困難を抱えていると考えられる生徒とレジリエンス

困難を抱えていると考えられる生徒として通信制高校のサポート校に通う生徒 9 名を対象に調査を行った。調査は多いもので 7 回、少ないもので 2 回行ない、レジリエンス、KOKORO スケール、セルフエスティーム、ソーシャルスキルなどについて調査した。レジリエンスの高低で 3 郡に分け、KOKORO スケールの変動を検討したところ、安心 不安得点もワクワク イライラ得点でもレジリエンス低群よりも高群の方が上下の変動が激しくなっていた(図 1、図 2)。

表 5 対象者の KOKORO スケール得点

	KOKOROスケール(安心 - 不安得点)							KOKOROスケール(ワクワク - イライラ得点)						
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
A	-10	-50						12	-50					
B	0	36						-20	10					
C	-40	-26						20	20					
D	-40	4						-25	-30					
E	-40	-40	-100	-100				16	-23	-100	-100			
F	35	0	0	0				44	0	0	0			
G	38	0	6	-40	-82	20	-60	-54	0	84	6	10	20	-4
H	30	21	48	40				60	66	54	70			
I	-22	90	48	92				80	90	51	86			
平均	-5.44	3.89	0.40	-1.60				14.78	9.22	17.80	12.40			
S.D.	31.067	40.129	54.117	65.805				40.430	42.321	64.790	65.671			



また、集団宿泊行事における養護教諭の対応が子どもの心の成長にどのような影響を及ぼすのかについて、レジリエンス尺度を活用して検討した。その結果健康面で養護教諭による対応を行った児童の体調不良者によるレジリエンスの低下が認められた。また、持病等で事前から配慮していた児童は、配慮していなかった児童に比べてレジリエンスの低下が少なかった。事前調査においてレジリエンスが特徴的な 3 名を抽出し、参与観察を行った。称賛の介入によって、中位の児童では自主性が高まった行動が見られ、直後のレジリエンスが上昇していた。低位の児童は追跡調査でのレジリエンスが上昇し、長期的な影響が見られた。以上より、目立たない場面にも着目し称賛することがレジリエンスを高めるために効果的であり、活動期間を体調よく過ごすことが心の成長につながると考えられる。集団宿泊行事において、養護教諭は身体を健康を支えることで子どもの心の成長に寄与できることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原郁水、伊東美咲、小西櫻子、古田真司	4. 巻 2
2. 論文標題 中学生のレジリエンスと心理的適応状態の変化 KOKOROスケールを用いた合唱コンクール前後4週間の縦断的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本養護実践学研究	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原郁水	4. 巻 2
2. 論文標題 養護実践学における事例研究の論文文化に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本養護実践学研究	6. 最初と最後の頁 5-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原郁水、古田真司	4. 巻 41
2. 論文標題 学校における一か月間の成功体験・失敗体験が中学生のレジリエンスに及ぼす影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東海学校保健研究	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武市裕子、原郁水、古田真司	4. 巻 1
2. 論文標題 集団宿泊行事において養護教諭による対応が児童のレジリエンスに及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 養護実践学研究	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原郁水、古田真司	4. 巻 122
2. 論文標題 通信制高等学校のサポート校に通う高校生のレジリエンスに関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 原郁水
2. 発表標題 集団宿泊的行事における体験が小学生のレジリエンスに与える影響
3. 学会等名 特別活動学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	古田 真司 (FURUTA Masashi) (90211531)	愛知教育大学 (13902)	
研究協力者	武市 裕子 (TAKEICHI Yuko)		
研究協力者	伊藤 美咲 (ITO Misaki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	小西 櫻子 (KONISHI Sakurako)		